観世流の舞台は、ほかのものとははっきりと違う、特有の流儀があります。ひとつは、家系です。観世家は、古典能創設者である、観阿弥・世阿弥につながっています。また、観世流の左近忠親（左近黒雪）は、宗家 9 世時代（1578 年から 1621 年）、徳川家康が徳川幕府として政権を取ると同時に、能の指導者として任命されました。この幕府からの保護により、能観世流の繁栄と長い歴史への道が開かれたのです。時を現在に進めると、およそ 70 パーセントの日本の能楽師は観世流です。この素晴らしく高い評価は、2016 年に観世流が米国ニューヨークのリンカーンセンターに招かれたとき、さらに確固たるものになりました。

観世家は、奈良や京都を起源としますが、江戸時代にまず能楽堂を構えたのは銀座でした。1972 年、能楽堂は、渋谷区松濤に移築された後、2017 年 4 月、銀座に戻りました。現在、豪華な観世能楽堂は、きらびやかな GINZA SIX の地下で見ることができます。舞台は、屋内にありながら、屋根も備えられ、能の伝統に忠実です—これは、能楽堂が戸外にあった、形成期の能の伝統に対する敬意を示すものです。

能には、200 から 250 の演目があり、ほとんどが、江戸時代の頃から変わらないものです。しかしながら、観世流はこれらの伝統演目を演じるだけではありません。独自の現代的な能も多く創作しています。春と秋は、年間 120 の舞台を公演するうち 80 公演が行われる盛んな時期になります。典型的な能の演舞は、4 時間続き、能の合間に、喜劇的な狂言と、その後、しめいという、選り抜きの能の概要のようなものが入ります。

観劇の楽しみ方として、舞台の能楽師の感情の表現の仕方と細部までのこだわりが見られる能面と衣装にうっとりすることが挙げられるでしょう。ほとんどの台詞は古語で念じられ、翻訳がなければ台詞を理解することは難しいため、台詞に追いつこうとする必要はありません。少しだけ味わってみたいということなら、特別割引の機会を狙ってみましょう。座席がある限り、能の最終演舞に限り 3 千円のみでチケットを購入することができます。

GINZA SIX の観世能楽堂は、能の演舞の場所だけのものではありません。ときどき、ポップコンサートやクラシックコンサートといった、ほかの演奏会やイベントも開催しています。